

有部の八事俱生説

吉 元 信 行

一 阿毘達磨において存在の分析がなされるとき、先ず諸法の俱生ということが問題となる。その諸法俱生の問題を色法に限れば、南北兩伝の阿毘達磨では色聚というものが説かれる。この色聚説の根本思想は、すべての具体的存在なる色法は、単一の色法から成つているものではなく、必ず幾種かの色法の合衆であると做すのである。

南伝パーリでは、これを rūpa kalāpa と呼び、ここでは、具体的存在たる外界の色法は、少くとも四大種と色・香・味・食 (jīva) との八色より成つていとされるもので (Abhidh. s. 29)、その色は具体的物質を意味するものではなく、その物質のもてる性質とか属性を意味するものであつた。これに対して、有部の色聚説には、その中に更に物質論としての極微説が取入れられたため、理解に困難な面が加わり、その理解をめぐつて、古くから種々論議を呼んできた。

有部における色聚は、rūpa-saṃghāta (Abhidh. k. 52) と呼ばれ、或はそれが saṃghāta-paramāṇu (Abhidh. k. vy. 123)

と言われることもあるように、極微説と結びついて、北伝阿毘達磨の完成された形である俱舍論や順正理論では、「八事俱生随一不滅 (aṣṭa-dravyaka utpadyate nānyatameṇa hīnaḥ)」⁽³⁾ というように説かれている。

この八事俱生説は、阿毘達磨初期論書には認められず、中期の大毘婆沙論によりやくその萌芽が見られ (大・二七・六八三 b)、阿毘曇心論等の後期論書に至つて始めて八事俱生なる概念ができてくる。阿毘曇心論では「極微有八種」 (大・二八・八一 b) と説かれるのみで、色聚と極微の關係ははつきりしない。ところが、雜阿毘曇心論では「極微共生」なる訳語が使われ、極微に事極微 (dravya-paramāṇu) と聚極微 (saṃghāta-) の二種があつて聚極微は事極微の聚合である (大・二八・八八二 b) として、ここに聚極微 (saṃghāta-paramāṇu) と色聚 (rūpa-saṃghāta) とが同視されてくる。阿毘曇心論經ではこれを「微塵」 (大・二八・八三七 c) と訳し、又、俱舍論では「微聚」 (冠導俱舍四・一右) と訳している。この様など

有部の八事俱生説（吉元）

ここに、後に、八事俱生説において言われる「聚極微（微聚）」と、極微説において言われる「微塵（anu）」とが混同されるようになるのであらう。

この様な有部の八事俱生説は、俱舍論では、「欲〔界〕」にて声なく根なき極微は八事をもてるもの（*kāme śādravyako 'śabdah paramāṇur anidriyaḥ*）（*Abhidh-k. kārīka II 22ab*）と頌せられ、その長行では次の様に解釈されてゐる。

「そ〔の極微〕は欲界において声なく根なきとき、八事をもてるもの（*asṭa-dravyaka*）として生起して、その中の一つでも減ずることはない。八事とは四大種と四所造色つまり色・香・味・触である。しかし、有根なる（身根あるいは眼乃至舌根をもてる）極微で声のないとき、九事あるいは十事をもてるものとして生起す。」（*Abhidh-k. 52~53*）

この八事俱生説は、その解釈をめぐつて様々な論議を生んでいることも事実である。⁽³⁾ その最も大きな理由は、諸先学の指摘する如く、色聚説と極微説を混同したための矛盾からくるものである⁽⁴⁾。

しかし、これら有部系の論書を見ると、必ずしも矛盾とは言えない一面も認められる。そのことを明かにするため、正統有部の伝統を継ぐと言われる *Abhidharmadīpa* と俱舍論を比較して、以下有部の八事俱生説の正義を追究したい。

二 *Abhidharmadīpa*（以下 *Dīpa* と称す）は、正統有部の

伝統を守り、衆賢の順正理論を典拠となし、俱舍論における世親の立場を破斥せんとする目的を以て、五・六世紀頃、ある衆賢の弟子によつて述作されたとされている。⁽⁵⁾ この論は、俱舍論を範型として構成されており、その八事俱生説に相当する部分では次の様に説かれている。

「欲〔界〕につて七事と相離れずしつある（*sapta-dravya-avinirbhāgi*）外的なる極微（*paramāṇu*）は、身においては「〔事〕ふえ（*ekadhika*）」、眼等におうづは「〔事〕ふえ。」⁽⁶⁾」

俱舍論や順正理論では、八事俱生と説かれて、八事が問題とされているのに、ここでは七事が問題にされているのは注目すべきことである。それについて、この部分の長行では次の様に解釈されている。

「そつ、最も細なるもので、色の合成を因として積集した〔有対色〕（*rūpa-samskāropādāna-samīcaya*）を分析した極限のものが極微であると了解される。しかし、そ〔の極微〕は七事と相離れずしてあるもの、〔つまり〕四大種と三所造色、あるいはそれぞれの三大種と四所造色（色・香・味・触）と相離れずして在る〔はたらきをもてる〕もの（*avinirbhāga-vartin*）であり、これが第八〔の事〕である。」（*Abhidh-d. 65*）

ここに、*Dīpa* で説かれる七事は、他の一極微と不相離なる七事ということで、やはり七事と一極微との関連において、八事俱生を言わんとしたものであらう。しかし、俱舍論

等における八事俱生を、この Dīpa のみが、何故七事と言いかえねばならなかつたのだらうか。この疑問を解明するには、先ず俱舍論と Dīpa の極微觀の相違を知らねばならない。

先ず俱舍論では、「最も細なる色の聚 (rūpa-saṅghāta) が極微であると言われる、それとは別のものは識別されないから」(Abhidh-k. 52) と、先に掲げた俱舍論の偈における「極微 (paramāṇu)」と云うのは、識別されうる物質としての色聚のことであると解説している。更にその註釈ではこの部分を次の様に註釈している。

「最も細なる色の聚 (rūpa-saṅghāta) が極微であるとは聚極微 (saṅghāta-paramāṇu) のこと、事極微 (dravya-) とはない。何故なら、そこに東西の方分のないもので、そのすべての色より小さい事 (dravya) が事極微である。だから、「事極微と」區別して聚極微であるところ。」(Abhidh-k-vy. 123)

ここに、八事の一一の事 (dravya) が事極微 (dravya-paramāṇu) であると言われた。その聚合たる聚極微 (saṅghāta-) がここで問題にされるのである。ところが Dīpa では、俱舍論のこの部分を引用して、それを次の様に批判している。

「しかし、俱舍の著者は『最も細なる色の聚が極微である』ところ。それによれば、聚とは異った他の色 (saṅghāta-vyatiriktaṁ rūpāṇ anyad) があると説くべきである。若し「他の色が」なければ、聚もまたないことになる。それ故に、「最も細なるもの

は色の極微である (sarva-sūksma rūpa-paramāṇuḥ)』と決定する。」(Abhidh-d. 65)

これによると、世親は俱舍論において、色を dravya として把え、その聚合を極微であると理解したことになる。それが註釈では、識別されうるものの最小単位たる聚極微のことであるとされる。その様なところに、更に俱舍論で「聚 (saṅghāta) は極微と別のものではない」(Abhidh-k. 33) とされ、それが「その聚は諸極微 (paramāṇavaṇ) と同じである、(中略) 聚は一でないという意味である」(Abhidh-k-vy. 85) と註釈されるのである。

これに対して、Dīpa では、色を極微積集なる有対色として把え、それを分析した極限の事極微をここで問題にするのである。この様な Dīpa の極微觀は、既に順正理論においても見られるところである。

「有対色中、最後細分、更不可析、名曰極微。謂、此極微更不可下以余色、覺慧分析為多。此即說為三色極少。(中略) 如是衆微展転和合定不離者、說為微聚。」(大・二九・三八三 c)

順正理論では、このように先ず事極微をとりあげつつ、その展転和合した「衆微 (saṅghāta-paramāṇu)」に言及している。八事はこの衆微(聚極微)に關して言われる。Dīpa では、覺慧によつて分析されたこの事極微のみを問題にして、あえて聚極微を問題にはしていない。むしろ、既説の如く、その

考えを批判さえしている。この理由として、私かに考えられることは、極微の積集をもつて諸法の無自性空たることを言わんとする大乘空論者の論難が、Dīpa において意識されたためではなかつたかと思われる。

三 以上の様に、俱舍論では、実体的存在としての色聚なる極微の聚合体を認識の対象として問題とした。順正理論では、それに対して実有なる事極微を問題としながらも、伝統的八事俱生説の説き方まで修正するには至らなかつた。ところが、これは後に極微説において言われている微塵（*anu*）と混同されるようになった。また、大乘空論者の論難も、まさにこの点に向けられたと思われる。

この様なところに、Dīpa では、順正理論の極微観をうけて、有対色を分析して極微に至つた実なる事極微の上に、八事を成立せしむるはたらきを見出すという、独自の説を打ち立てたのである。それが、七事と不相離なる極微ということである。大乘空論者ならば、八事の中のそれぞれの七事と一事の相依相待の關係に、無自性空なるものを見出したであろう。それに対して、Dīpa では、七事と不相離なる事極微を第八の事として、それぞれの事極微の上に、八事を相離さないところの作用性を見出したのである。この様な極微の作用性は、ジャイナの哲学においても認められるところである。

また、順正理論においても極微の作用性が問題にされている。

それは、世親と衆賢の感覺論の相違をみるとはつきりする。すなわち、それは「極微は」蝕れることはないが無間なるとき（*nirantaro*）蝕られる」（*Abhidh-k-33*）という大徳の説の解釈をめぐる論議に見られるものである。称友はこれを「それはまさにそれら（極微）の間に間隙のないことで、中に何も無いことである」（*Abhidh-k-vy-85*）と、無間というのは物理的空間のないことであると解釈する。ところが、順正理論では「無極微量触色所間故名無間、如是無間大種極微隣近生時、仮説触」（大・二九・三七三）というように、極微自体に既に隣近した生ずる作用が含まれているばかりでなく、極微相互に入り乱れて行き合うことを妨げる作用もまた保持されているとされる。

この様な考え方は、Dīpa に至つて更にはつきりする。すなわち、Dīpa 三三偈の長行では、「事物（*vasu*）すなわち事（*dravya*）に依存してゐるのが勢力（*śakti*）であり、この事ははたらき（*virtu*）を起す時が現在である」（*Abhidh-d-281*）と説かれる。これによると、Dīpa では極微を事（*dravya*）としてとらえ、その事の上に勢力なるはたらき（作用性）を見出したのである。この作用性を説明せんがため、Dīpa では特に七事と一極微の相關關係において八事俱生を証明せんとしたのであろう。

四 以上考察した様な作用をもてる極微というのは、極微

そのものであるというよりは、むしろ、ある物質のもてる属性であると理解することができる。その属性の聚合である八事がある物質として成立せしむるもの、それが俱舍論では聚極微の上に見出され、Dīpa では事極微における作用性として見出されたのである。この様にして、第八の事をはたらしをもてる事極微とし、そのはたらきが彼の七事と不相離ならしむるものであり、そこに勝義としての存在があり、それが事物を存在せしむる作用性であるとされるのである。この様なところに称友も次の様に説明している。

「根本的なはたらきとして (mukhya-vṛtṭi) ¹、そこにある事 (dravya) があるとき、それが事であること認められる。あるいはまた、処 (āyatana) は事であるというようにかかる。何故なら、一般的な、そしてある特殊な相は実有 (sād-bhava) であるから、処もまた事であるということがべき」 (Abhidh-k-vy. 125) すなわち、ここでは実有なるものは事 (dravya) であるとする。このようにして、有部では物質のもてる性質や属性ですらも実有なる事 (dravya) であると理解されたのである。だから、四大と所造色もまた八事 (dravya) として並列的に説かれているのである。dravya は知覚の対象となるものである。そうすれば、dravya の聚合たる八事が俱生するということは、知覚されて在ることになる。

しかし、俱舍論等では、感覚の対象として識別されうる極

微と知覚の対象となる dravya を結びつけようとするところに不徹底な面があつた。それに対して、八事俱生説における極微をも、知覚 (buddhi) を以て分析せんとする Dīpa の立場は、有部の八事俱生説の正義を見事に確立したとすることができる。そうすれば、むしろ、色聚説と極微説を融合させたところに有部の八事俱生説の特色があるといえることができる。

1 水野弘元「仏教における色(物質)の概念について」宇井博士還暦記念印度哲学と仏教の諸問題(岩波書店)四八九～四九二頁、W. M. McGovern: A Manual of Buddhist Philosophy, Vol. I, London, 1923, p. 126 参照。

2 冠導俱舍論四・一左、順正理論十(大・二九・三八三)¹、P. Pradhan (ed.): Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1967, (Abhidh-k.) p. 52。

3 この様な論議は、古くは俱舍論自体にも見出される (Abhidh-k. 53、冠導俱舍四・一左～三右)。後の註釈では、明かに極微論と混同され、ある物質の有する極微の数まで計算されるようになる (俱舍頌疏鈔、記続八三一五・四一四右)。

4 赤沼智善教授は、極微論に四大説を押し入れた無理を指摘し「(仏教教理の研究) 名古屋・昭一四・三五八頁」、山田恭道氏は俱舍論における極微観の不徹底さを指摘し「(有部の極微説について) 宗教研究第一四六・三〇三頁」、更に水野弘元博士は、

有部の八事俱生説(吉 元)

- 色法論に極微説をとり入れたのは不都合であり、後に色聚を物質の聚合として説いたのは誤解であると批判している(前掲「仏教における色の概念について」四九四～四九六頁)。⁶ 尚、Th. Stecherbatsky 氏図者を図視して理解している(『The Central Conception of Buddhism』, London, 1923, pp. 11～12)
- 5 Abhidharmadīpa について G. H. Sasaki: *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvitī*, Bulletin of the School of Oriental and African Studies XXV; part 2, University of London, pp. 373～375. 佐々木現順「阿毘達磨順正理論」東大願寺・昭四四・四～五頁参照。

- 6 P. S. Jaini (ed.): *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvitī*, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna, 1959 (Abhidh-d.) p. 65.

- 7 この部分に相当するチベット語は“chams-cad pas phra-baḥi gzugs ni bsags-paḥi rdu-l-phra-rab ges bya ste.”(最も細なる色が聚極微である)(影印版一一五卷・六三函・七〇四)と“rūpam saṃghātaḥ”を理解しているが、称友の註釈を Dīpa によつて“rūpa-saṃghātaḥ”とされているの⁷、後世の解釈はともかく、世親は「色の聚」と理解したであろう。

- 8 大乘の論書では、諸法の無自性空なることを証明するため、有部の八事俱生説を利用した様である。例えば阿毘達磨集論では次の様に言っている。「次に、色の積集(rūpa-samudāya)と言うのは、こゝには、実体のなら(niṣkāra)極微であると知るべきである。ただ覺慧(buddhi)になつて極限にまで分析することによる極微の建立は、〔それを〕一かたまりのもの

と想つて(piṇḍa-saṃjñā)判断せんがため、そして色の中に事(dravya)が実現しなると悟入せんがためである。」(P. Pra-dhan ed.: *Abhidharmasamuccaya of Asaṅga*, Visva-Bhārati, Santiniketan, 1950, pp. 41～42) 彼の註釈である Abhidharmasamuccayabhāṣya (チベット訳・影印版一一三卷・五七函・四八八～四九八、漢訳「大乘阿毘達磨雜集論」大・三一・七二二c)では更に詳しく説明をしている。

- 9 月称の中観五蘊論では、七事と一事の関係におつて、八事俱生説を論難している。

「また次に、すべてのものより細なる色の体(gzugs gyi ho-bo)が極微であると説かれる。それは欲界では根より外にあるとき、八事をもつてのものでない(rdsas bryad dan ldan par)生ずる。(中略)その場合、八事をもつてという極微の八事は、さくらの果実の如く、自体が別々に存在することなく、(中略)聚合して存在する。さらにその場合、極微のそれぞれの七事は(rdsas bdun bdun la)因待せずには各々が別に成立しないから、自体としての成就はない[ことにならぬ]」(影印版九九卷・二四函・二八七・a・c)

- 10 cf. M. L. Mehta: *Outlines of Jaina Philosophy*, Jain Mission Society, India, 1954, p. 23.

- 11 佐々木現順「阿毘達磨思想研究」(弘文堂)東京・昭三四・三三七～三四〇頁参照。

- 12 ジャーナ經典にも実有(sat)なる語のかわりに dravya が使われている。(前掲 *Outlines of Jaina Philosophy*, p. 32)
- (昭和四十六年度文部省科学研究費による成果の一部)